

ス革命が連邦主義から急進的なナショナリズムに方向転換をはじめたとき、スイスの実験は失敗に終わったのだ。我我カナダ人は、ナショナリズムの熱病を避け、反国家を創り出す時間的余裕もつた数少ない国民のひとつなのだ……」

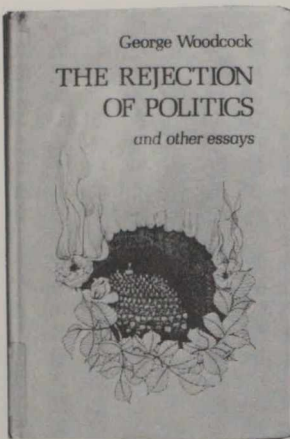
彼は世界を旅しながら、過去の歴史を振り返りながら、また内外の社会的混乱について述べながら、常に目をコミュニティと自由に向け、地方の独立と協同を通してそれらの価値を再認識しようとしている。現代産業社会の抑圧的な中央集権化に抵抗する人々、圧倒的に不利な条件の下で外部の権力から自分達の一体性と固有の慣習を守ろうとしている集団——ジョージ・ウッドコックが描くのはみんなこうした人ばかりだ。これこそ、彼の旅行記、歴史書、伝記を貫く共通の糸である。

彼はどのようにして題材を選び、題材に接近する方法を決めるのだろうか。この問いを解く手がかりとして、彼のアナキズムに対する信念をあげることができる。ジョージ・ウッドコックは、アナキストである。アナキキとは、秩序の欠如を意味するのではない。外部権力の不在を意味するにすぎない。アナキキズムは国家の代わりに、自由な人間における自発的な共同関係を置こうとする。人間は自己の内部に道徳的な力と、共同社会への自然の志向性を持っているのだと、アナキキストは信じている。この道徳的力と共同社会への志向性は、国家を破壊した後にも生き残り、自治的な同胞愛が連邦制でひとつに結ばれるという新しい秩序を打ち立てるにあたってその基

礎となるものである。

アナキキズムはもとひとつの理想であると同時に運動であった。十九世紀後半の国際社会主義運動において自由意志派なるものを形成していた。この運動の中から、詩人が思想家が、ロマンチックなヒーローが、そして時には道化師が、また少数のテロリストが生まれた（テロリストについてウッドコックは「アナキキズムの暗黒の天使たち」と呼んでいる）。長い歴史の過程では、沸き立つような勝利の瞬間もほんの数回経験した——中でもよく知られているのはパリコミューンとスペイン内乱の労働の団結だ——が、やがて左翼陣営からは権力主義化したマルクス主義者の攻撃を受け、そのほかあらゆる現代政治理論に特徴的な国家主義の集中攻撃を受けて、弾圧されてしまった。「ほぼ一世紀に及ぶ努力の結果——とウッドコックはまずアナキキスト運動の努力を認めておいてから言う——この運動は、国家を打ち壊し、その廢墟にエルサレムを築くという大目的に向かつて近づくことすらまだできない。」このため、彼は少々憂いに沈んでいるようだが、決してノスタルジックになっっているわけではない。

運動の失敗は、彼の主張するところに



よれば、強制的な権力の存在しない社会という思想を何ら否定するものではない。その思想はアナキキスト運動の歴史よりもさらに古くからあり、運動の悲痛な敗北以後にも生き続けている。実現されないからといって、理想の価値がなくなるわけではない。ウッドコックにとって、アナキキズムとは、現代世界の中で十分正当性を持ち続けるひとつの信条であり、判断基準である。彼は「アナキキズム」の結語として、次のように書いている。「今なお世界を支配している中央集権化への動きが存在し威力を振るっているのを認めることは、それを受け容れることとは全く別のことだ。もし人間的な価値が今後も生き残っていくべきであるとするならば、均一な世界の全体主義的な目的（理想）に対し逆理想を対置しなければならぬ。そしてその逆理想とはまさに十七世紀のウインスタンレー以来、アナキキストおよびアナキキストに近い作家を鼓舞してきた純粋な自由というビジョンにこそ求められなければならない。それがすぐに実現可能でないことは明らかであり、否、むしろ理想であるからこそ、おそらくは決して実現されないであろう。しかしそのような純粋な自由という観念が存在しているだけで、我々は自らの現状を判断し目的を見失わずにいられるのだ。それのおかげで我々は今後も侵略を続ける中央集権国家に対し、現在もっている自由の全てを守ることでできるし、また、個人の価値が今でも支配している領域を維持し、あるいは拡大することすらできる。中央集権化への世界的な動きが歴史上のあらゆる運動

の例にもれず推進力を失う日まで、その腐敗の真只中で個人の選択と判断によるモラルの力が再び強まってくる日まで、今後数十年間の危機の時代を単に生きのびることが我々の緊急の課題だが、この点でも純粋な自由の観念は大きな存在意義を持つ。」

ウッドコックは、我々が半ば忘れかけた夢を語りかけてくれる。彼が書く旅行記や歴史物は、拒絶されたもうひとつの道、今もお生き延びようと必死に闘っている真のコミュニティのことを、我々に思い起こさせる。彼が書く伝記の中の男や女は、我々に普遍的な真理を示して見せる。彼は書いている。「偉大なアナキキストたちは、王子たちのように胸をはって自分自身の道徳の上に立つことを我々に要求する。内に燃える炎としての正義に気づき、我々の耳を日々襲うプロバガンダのコーラスよりも我々自身の心の内の小さな静かな声の方が真実を告げているのだ、ということをお学ぼう要求している……」と。

ジョージ・ウッドコックの最新刊「South Sea Journey(南の海への旅)」は、一九七七年春に米加兩國(ホワイトサイド社)とフィッツヘンリー社)から出版された。彼の作品のうち、これまで日本語に訳されているものとしては、次の二つがある。「古代インドとギリシャ文化」、金倉圓照、塚本慶祥訳注、平楽寺書店(京都)、および「アナキキズム」、全二巻、白井厚訳、紀伊国屋。(ネリス氏はヨーク大学の歴史学教授。昨年の七月まで二年間、筑波大学、慶応大学などでカナダ講座を担当した。)